

晒井の人ならびたる夕餉かな
美しき籠に入れたる林檎かな
出干や孫に物言ふ鑑匱
炎天や寺に葬儀の人だまり
行水の垣のぞきけり白き肌
裏戸から人の入り来る蚊遣かな
青芒は馬に喰はれぬ百合の花
日盛や藍を干したる門蓮
石段や花袖こぼるゝ朝の雨
有明の草に夕沙やねらひがり
鯛や釣瓶の音を前後して
巖頭に狂女の立てり夏の海
京人形子の抱たまゝ晝寐かな
冷夢に胡蘆かへたる團扇かな
寄りかゝる二階柱や絹團扇
煽り立つ搦風呂の下や漣團扇
爪切て庭に捨てたる團扇かな
腎べたを裸のたゝく團扇かな
水草に追はれてすがる螢かな
雲の峯崩れて雨となる夜かな
まだ雪の重みは知らず今年竹
飴賣や團扇投出す男の子
襪に脇差さして漣團扇

同 樂 水
同 同
同 雪 舟
同 閑 人
同 さだ 女
同 白 醉 樓
同 同
同 紫 耶
同 同
同 同
同 同
同 曉 霞
同 同
同 奇 零
同 同

口多き大工の妻や漣團扇 同
道出て、團扇を探る夜頃かな 同
噓して顔かくしけり絹うちば 同

黒子と笑顔

左の一篇は時事新報附録文藝週報に松旭齋天勝の談話なりとして記載されたるものなり。西洋の藝人どもが如何に其化粧法に巧みなるかを知ることを得可く且面白き節もあれば茲に轉載すること、せり。

私は十二歳の時から舞臺へ出まして手品は遣つて居りました。始めの内は少しも極りの悪いと云ふ事は御座いませんでした。十五六になつてからは、少しは舞臺で口上を云ひます様になつて、其口上を云ふのが極りが悪う御座いました、夫れから始めて外國へ參つた時には、種々失錯が御座いましたが第一に白粉の塗り方が悪いと云つて笑はれたので、御座いますと申すのは、私は日本流に白粉をコテ〜に塗つて、口へ紅を濃くさして舞臺へ出ましますのです。すると、日本の婦人はお化粧の様な顔だとか、死んだ人の様だと、云はれました、それで、一座を仕て居る胡蝶の舞ひを遣る西洋婦人に、化粧を仕て貰ひまして、

夫れから段々に覺えたので御座います、彼地の白粉は、日本の白粉の様に濃くは御座いませんで、薄いのから段々にあるので其中には男の附ける極く薄いのなどもあります、其中の程の宜いのを塗つて、次第に濃いのを塗る様になつて居ります夫れから絲で出來たブラシ(日本の舞ひ刷毛)の様な物で群のない様に仕て置きました、今度は桃色の濃い油を眼の下から頬へ掛けて塗りますので、白い處は僅か鼻と額だけに致します。夫れから藍色のグリスペンと云ふ油を眼縁へ塗りまして、長く眼尻を下げる様に致します。次ぎに黒いチツクをマツチの先きへ附けて、上瞼の毛は上へ上がる様に塗り、又下瞼の松毛は下へ向く様に塗ります。前に藍色のグリスペンを塗つた後へ、松毛を上下に向ますから、自然と眼がパツチリとして涼しく見える様になります。夫れから眉毛墨は、茶色と黒色が御座います。是れは何らでも自分の勝手に御座いますが、私は重に黒い方を用ひて居りました。夫れから口紅のグリスペンは少し厚手に入れますので、是れは口の端の兩方へ濃く入れますと、口が締つて見えます、夫れから頬紅を鼻の穴と耳の穴へ塗るので、是れで初化粧は一通で御座いますが、尙懸々愛嬌墨子を附けるので御座います、私は眉毛の傍へ小さいのを一つ描いて、額の傍へ少し大きいのを描きます、是れは自分顔に釣合ふ様に勝手に入れるので御座います彼地の藝人は藝を仕て居ります間も、始終愛嬌と云ふ事に重きを置いて、笑ひを洩して居りますが、日本の藝人は一生懸命になり過ぎて、つひ強い顔をする様になり

ますので彼地へ行つてから夫れでは不可／＼と注意されましたが、第一に出來なかつたのは、引込みの笑ひで御座います。何うも兩手を口の處へ遣つて、夫れを開いた形の挨拶が出來なかつたので、始めは片手で遣る事に致しましたが、手の方は出來ても、身體の形が附かなくなりまして、又身體の事斗りを考へて居ると顔の方が強くなりますので、三拍子揃はせるのは六ヶ敷かつたので御座います、其中段々に形が附いて來ましたが彼地では氣に入ると、二度も三度も手を叩かれるので、其度に出て挨拶を致しますが、始めは漸々遣つて居るのを、夫れを二度も三度も引張り出されるには困りました。夫れから花束を貰つた時に何う受けて宜いのか、香ひを嗅ぐ事も何も知らずに、唯だ戴いて遣入つて仕舞ひましたが、其後大花籠を貰つた時には、是れは持つて遣入られないので、致し方なく其儘置いて遣入りました。その置いて遣入の方が宜かつたのだソツで御座います。

